

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20500562

研究課題名(和文)

スペクテイタースポーツが都市コミュニティの再生に及ぼす影響について

研究課題名(英文)

Effects of a spectator sport on the revitalization of the communities in urban area.

研究代表者 西山 哲郎 (NISHIYAMA TETSUO)

関西大学・人間健康学部・教授

研究者番号：10263188

研究成果の概要(和文)：1990年代以降の日本におけるグローバル化と少子高齢化の進展は、(東京を除く)大都市圏で地域アイデンティティの希薄化と住民の無力感を助長した。本来、地域アイデンティティは市民活動のインフラを形成するものだが、その弱体化に抗して、プロ野球のように大都市圏の境界と合致する営業圏をもつスペクテイタースポーツがどう貢献できるか、本研究ではその潜在的な可能性を模索した。

研究成果の概要(英文)：From 1990s, the progress of globalization, the decreasing number of the youth, and the growing population of the aged in Japan has aggravated the identity problem of our communities in urban area (with the exception of Tokyo) and encouraged the powerless feelings haunted in their residents' minds. Basically, the identity of a community constitutes the infrastructure of citizens' movements. They are now threatened by the over-fluidity in our urban life. In our research project, we have tried to find out the latent possibilities of a spectator sport to solve these problems. Because the franchise area of a team in Nippon Professional Baseball League (NPB) often accord with the *de facto* outlines of an urban community, the marketing activities of a NPB team tend to stimulate its residents to be keen to their identity.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：スポーツ科学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：コミュニティ, スポーツ, プロ野球, 地域振興, 市民, 文化, 社会学, 都市

## 1. 研究開始当初の背景

サッカーJリーグの発足以来、スペクテイタースポーツは地域振興との関係で注目されるようになった。プロ野球でも、仙台における楽天球団の設立や北海道日本ハムファイターズの優勝が地域にもたらした興奮は、

スポーツによる地域振興が小規模な町おこしにとどまらず地方大都市圏の再生に寄与しうることを示唆している。そうした観点から、名古屋大都市圏において70年を超える歴史をもつプロ野球球団(中日ドラゴンズ)の協力を得て、本研究はスタートした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本のプロ野球（NPB）というスペクテイタースポーツをめぐって名古屋大都市圏の市民がファンとして織りなす活動に注目することで、地域アイデンティティと文化活動を活性化する道を模索し、都市コミュニティの再生を図るものである。

それと同時に、地域のプロ野球球団（中日ドラゴンズ）や球場（ナゴヤドーム）との連携をもとに、観客を対象とした学生参加の量的調査を実施し、得られたデータ（カテゴリーカル・データが中心となる）から意味のある結論を引き出すための分析方法を開発することも目指した。

なお、球団や球場と連携した上での学生参加の調査ということに絡めて、本研究は3つの主要な側面をもつことになった。すなわち、本来の目的であるスポーツ社会学の「学術研究」という側面以外に、学生の社会調査教育の実習としての「教育」という側面、さらに、球団運営の参考に供するという意味での「事業」という側面である。これらを、全体としてバランスをとりながら実行していくことが、研究代表者および連携研究者にとって大きな課題となった。

## 3. 研究の方法

中心的な活動は、中日ドラゴンズが本拠地とするナゴヤドームで2006年から2009年まで毎年行った定点観測的アンケート調査である。各年度における調査の詳細は下記の通りである。

### 第1回

日時： 2006年 6月18日（土）13:00～15:00  
対ソフトバンク戦 試合開始直前まで  
対象者の数（有効回収数）： 1、373（名）  
調査員の数： 約150名

### 第2回

日時： 2007年 6月23日（土）13:00～15:00  
対ソフトバンク戦 試合開始直前まで  
対象者の数（有効回収数）： 917（名）  
調査員の数： 約100名

### 第3回

日時： 2007年 7月5日（木）16:00～18:00 対  
広島戦 試合開始直前まで  
対象者の数（有効回収数）： 661（名）  
調査員の数： 約100名

### 第4回

日時： 2008年 6月7日（土）13:00～15:00  
対日本ハム戦 試合開始直前まで  
場所： ナゴヤドーム 観客席

対象者の数（有効回収数）： 1、014（名）  
調査員の数： 100名

### 第5回

日時： 2009年 6月 6日（土）13:00～15:00  
対ロッテ戦 試合開始直前まで  
対象者の数（有効回収数）： 973（名）  
調査員の数： 100名

なお調査場所はすべて、ナゴヤドーム観客席であり、実施方法は、調査員2名一組による面接調査であるが、一部、調査票の手渡しにより対象者が記入する方法をとった。

これ以外にも、ナゴヤドームに限らず愛知県各地で参与観察を行ってきた。

さらに、2008年には東北楽天ゴールデンイーグルスの本拠地・仙台球場でボランティアの方にインタビュー調査を行った。

2009年には名古屋の高校野球チームの指導者からプロ野球を下支えしている地域の野球文化について聞き取り調査をしている。

また同年には、大都市圏との比較対象として中日ドラゴンズが経営を支援している独立プロ野球リーグ・北信越BCリーグの富山サンダーバーズの活動の参与観察を通じて地方都市の調査も行っている。

あと、2010年には英国の著名なスポーツ社会学者 John Horne 氏を招いて、英米のスペクテイタースポーツと地域の関係に関する解説を受けた。

## 4. 研究成果

上記のような調査活動の結果、日本の大都市圏でプロ野球のようなスペクテイタースポーツが地域アイデンティティの活性化に寄与できる条件のいくつかを明らかにできた。また、プロ野球ファンの活動は単に地域アイデンティティを明確化しただけにとどまらず、経済的な利害以外の動機から地域や近隣の人々と関わろうとする動きを促進することが観察された。

次に、ナゴヤドームにおける量的調査に関して、いくつかの興味ある結果について記す。

### 4.1 球団のイメージ

これについては、意味的に対立する形容語の対を用いて、5回の調査すべてにおいて、調査を実施した。形容語対は、調査ごとに少しずつ入れ替えられたが、最終の第5回における項目群と、主成分分析、バリマックス回転による負荷豪列を次ページに示す。

3つの主成分については、第Ⅰ主成分が「攻めの姿勢」第Ⅱ主成分が「ポジティブな評価」、第Ⅲ主成分が「スマートさ」と解釈できると考えられる。

それぞれの主成分に高く負荷する項目を単純加算した尺度の平均値を見ると、「攻めの姿勢」については著しく低く、多くの対象者が当該チーム（中日ドラゴンズ）を「守り」のチームと見ていることがわかる。「強さ」については、対象者の約90%がドラゴンズファンであることから当然予想されるように、非常に高い平均値が得られる。第Ⅲ主成分については、大体中間程度の評価となる。

質問項目	I	II	III
(1) 派手 / 地味	<b>0.70</b>	0.01	0.20
(2) 攻撃的 / 守備的	<b>0.51</b>	-0.10	0.33
(3) ねばり強い / あきらめがいい	0.06	<b>0.78</b>	-0.11
(4) 知的 / 野性的	<b>-0.56</b>	0.25	0.30
(5) 活気がある / おとなしい	<b>0.73</b>	0.23	0.14
(6) 情熱的 / クール	<b>0.71</b>	0.09	-0.13
(7) 洗練された / 荒削りな	-0.23	<b>0.64</b>	0.28
(8) 強者 / 弱者	0.16	<b>0.75</b>	0.13
(9) エリート的 / 庶民的	-0.04	0.02	<b>0.81</b>
(10) 都会的 / 田舎的	0.21	0.16	<b>0.70</b>
(11) 人気がある / 人気がない	0.26	<b>0.49</b>	0.14

初期の段階において、我々はこの「おとなしい」イメージがファンに受け入れられているものと考えていた。

しかしながら、最終の第5回の調査において、ほぼ同一の項目による「理想のイメージ」の評価を求めたところ、ファンは現実とは正反対の「攻撃的」なチーム像を理想としていることが明らかになった。「攻めの姿勢」について、年齢別、性別の理想と現実の平均値を下の表に示す。

	10~ 19歳	20~ 29歳	30~ 39歳	40~ 49歳	50歳 以上
男性 理想	8.62	8.93	8.84	9.74	9.71
女性 理想	8.44	8.79	9.04	8.92	9.76
男性 現実	7.00	5.48	5.31	5.66	6.00
女性 現実	7.03	6.16	6.05	6.43	6.12

男女を問わず、理想の「攻めの姿勢」得点は現実のそれを大きく上回っている。しかも、その discrepancy は高齢者ほど大きい傾向がある。

地域のプロ野球球団をコミュニティ形成の一つの核と考える場合、その球団のイメージが住民全体の望むものに近いかどうかは非常に重要であると思われる。その点から、この結果はチーム作りの指針としての側面とともに、球団としてのイメージ戦略と言う観点からも重要なヒントとなるであろう。

#### 4.2 プロ野球に関心をもつきっかけ

球団がコミュニティづくりの核となるためには、それが住民から受け入れられるキャラクターをもつことは重要であるが、それ以上に、まずは住民がプロ野球そのものに興味を持つことが前提である。その点で、やはり第5回調査に加えられた、プロ野球に関心をもった理由にかかわる質問に対する回答は興味深いものである。

ここで用いられた選択肢（複数選択可）は次の11の語句であった。付された数値は、全対象者による反応のパーセンテージである。

(1) 家族の影響で	38.2
(2) 友人、知人の影響で	16.5
(3) 野球をやった経験があるから	27.6
(4) プロのプレイの迫力	22.5
(5) テレビで試合がよく放送されるから	9.9
(6) アニメやマンガの影響で	3.0
(7) 応援する球団があるから	40.3
(8) 応援する選手がいるから	22.1
(9) 一緒に応援する仲間がいるから	15.9
(10) 野球場の雰囲気が好きだから	35.6
(11) その他	2.8

「応援する球団があること」、「家族の影響で」に続いて、「野球場の雰囲気が好きだから」に3分の1以上の対象者が反応していることは興味深い。

ここでも、「その他」を除く10項目について主成分分析が行われた（これは、2カテゴリーのデータに多重対応分析を行ったことに等しいことは、最近、山田・西里（1993）によって解明されている）。その結果、4つの主成分が見出されたが、そのうち最も多くの分散を説明する主成分には、項目、(4)、(7)、(8)、(9)、(10)が高い負荷量をもつ。これらは、野球観戦の最も中心的な特性であると考えられ、「スペクテイタースポーツへのオーセンティックな態度」と呼ぶことができるであろう。対応する主成分得点を、年齢別、性別に集計したものが下の表である。

	10代	20代	30代	40代	50代以上
男性	-0.09	-0.11	0.08	-0.02	0.00
女性	<b>0.37</b>	<b>0.41</b>	-0.13	-0.02	-0.17

少々意外なことに、こうしたオーセンティックな態度をもっているのは、10代から20代の女性であり、かつ、その値は突出している。球団はともすれば、女性客（特に若い）を「男性に同伴して来場する存在」として軽視し、彼女らの意向を調査したり、それに対応する球場運営を行うことを怠ってきた傾

向があることは否定できないであろう。この結果はそうした傾向に対して警鐘をならすものであると考えられる。

#### 4.3 中点評定の意味

たとえば、4.1 で示した3段階の評定を計量的変数として分析すること（たとえば、「派手」に3、/（どちらでもない）に2、「地味」に1という数字を与える）には、しばしば疑問が呈される。

本研究では、次のような方法が提案された。すなわち、

1. 3つの値を順序のないカテゴリカル・データとして多重対応分析を行う。
2. 数値化されたカテゴリー座標値を数値と考へて、それと個体スコアの相関係数としての負荷行列を計算する。
3. 負荷行列を前後から直交回転する。

これを、前述のイメージデータに適用した。その結果、

1. 解の一部として、データを敬老的なものとみなして主成分分析した結果と同じものが得られる。
2. 残りの部分は、対象者が、（おそらく対象で球団についてくわしく知らないために判断を回避し、「どちらでもない」と言う反応を選択する傾向と解釈できる。

対象者全員が知悉していると考えられる態度対象（「大学における学習」）を態度対象としたデータでは、そうした第2の次元は見出されず、見かけ上同一の3段階評定にも異なった構造的特徴が存在することがあきらかになった（詳細は足立・村上（2011）に記した）。

#### 4.4 学生によるプレゼンテーションと球団運営への貢献

2006年度の最初の調査依頼、ドーム調査の結果は複数の学生グループが（むろん、研究代表者、分担者の指導の下に）分析し、最終的に、球団事務所においてプレゼンテーションを行ってきた。

この結果は、陰に陽に球団運営に影響を与えてきたが、明確な形で新聞報道されたものとして、2009年度の女子学生のグループの発表が、2010年度からのナゴヤドームにおける女性専用シートの新設につながったことが挙げられる（2010年1月28日づけ「中日新聞」朝刊、ならびに、同日づけ「スポーツ報知」）。これは、研究目的の項で述べた、本研究の「教育」、「事業」の側面の目に見える成果として記しておく。

最後に今後の計画として、本研究の成果すべてを総括して出版社から単著として出版することを予定している（ただし、どこから

出版するかについては交渉中）。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 西山哲郎、村上隆 プロ野球の観客がもつ球団のイメージ—理想と現実の差と個人差の分析、中京大学現代社会学部紀要、査読無、4巻2号、2011、177—196

〔学会発表〕（計1件）

- ① 西山哲郎 近代スポーツ文化と社会学、日本スポーツ社会学会第18回大会、2009年3月23日、関西大学

〔図書〕（計2件）

- ① 西山哲郎 一誠社、スポーツ文化批判を通じた近代解釈の再検討、2009、136
- ② 足立浩平・村上隆 朝倉書店 主成分分析と多重対応分析：非計量多変量解析法、2011、169（印刷中）

〔その他〕

ホームページ等

<http://nc.chukyo-u.ac.jp/gendaisyakai/dragons/index.html>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

西山 哲郎 (NISHIYAMA TETSUO)  
関西大学・人間健康学部・教授  
研究者番号：10263188

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

川田 牧人 (KAWADA MAKITO)  
中京大学・現代社会学部・教授  
研究者番号：30260110  
斉藤 尚文 (SAITO HISAHUMI)  
中京大学・現代社会学部・教授  
研究者番号：10170523  
村上 隆 (MURAKAMI TAKASHI)  
中京大学・現代社会学部・教授  
研究者番号：70093078